

発現する

アート・ドキュメンテーション学会2007年度年次大会
2007 Annual Conference of JADS: Japan Art Documentation Society
主催: アート・ドキュメンテーション学会 / 国立新美術館

予稿集

シンポジウム

発現するドキュメンテーション 蓄積と検索から表現へ

Documentation as apparition: from storage and retrieval to 'expression'

2007年6月23日(土) 6月24日(日)
於: 国立新美術館



ドキュメンテーション

2007年度（第18回）アート・ドキュメンテーション学会 年次大会 2007.6.23-24 於・国立新美術館
シンポジウム「発現するドキュメンテーション 蓄積と検索から表現へ」

予稿集

目次

はじめに	5
大会プログラム	7
第53回 研究会 シンポジウム	9
イントロダクション ◎水谷長志	11
カンブリアンゲーム—作動するテキスト ◎安齋利洋	12
メタファーとカップリング—アート・アーカイヴにおける時空間 ◎前田富士男	13
連想がつなぐ文化財の情報発信 ◎丸川雄三	14
想起する街—図書街プロジェクト ◎金子郁容	15
第54回 研究会 公募研究発表	17
デジタルアーカイブの公開と活用—教育普及活動へのデジタルアーカイブの活用と課題	
◎奥本素子	19
展覧会カタログに関する言説の系譜的研究の試み ◎吉川恵子, 長屋俊, 水谷長志	22
日本の美術雑誌—永遠の経過報告 ◎森仁史, 堀越洋一郎	25
アート・ドキュメンテーションの教育と研修—大学院レベルでの現職研修の可能性を求めて	
◎波多野宏之	28
第39回 見学会	31
アートライブラリー	33
別館	34

はじめに

収集し組織化してクエリー（query、問い合わせ）を待つ、クエリーが投げかけられなければ、動かない：動き出さないデータベース、ではなく、集積され組織化されるもの、それ自体：総体が、自ら発現し表現をめざすようなドキュメンテーション。観る者が、集積の個々と全体を把握しつつ感応できるようなドキュメンテーション、は可能か、意味はあるか。2007年1月誕生の5番目の国立美術館、国立新美術館において、アート・ドキュメンテーションのあらたな可能性に向けて「発現(apparition)」をキーワードにシンポジウムを開催いたします。

主催者

プログラム

6月23日(土)	[開場 13:00] 国立新美術館講堂
13:30-13:45	主催者挨拶 国立新美術館 館長 林田英樹 アート・ドキュメンテーション学会 会長 高山正也
	シンポジウム「発現するドキュメンテーション 蓄積と検索から表現へ」[JADS 第 53 回研究会]
13:45-14:00	イントロダクション 水谷長志 (独立行政法人国立美術館情報企画室長)
14:00-14:30	安齋利洋 (システムアーティスト) 「カンブリアンゲーム——作動するテキスト」
14:30-15:00	前田富士男 (慶應義塾大学文学部教授、同大学アート・センター所長) 「メタファーとカップリング——アート・アーカイヴにおける時空間」
15:00-15:30	丸川雄三 (国立情報学研究所特任准教授、独立行政法人国立美術館情報企画室客員研究員) 「連想がつなぐ文化財の情報発信」
15:30-16:00	金子郁容 (慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、同大学湘南藤沢メディアセンター所長) 「想起する街—図書街プロジェクト」
16:00-16:30	休憩
16:30-17:30	パネルディスカッション 司会 水谷長志、パネリスト：安齋利洋、前田富士男、丸川雄三、金子郁容
17:30	閉会
18:30-	懇親会
6月24日(日)	[開場 9:30] 国立新美術館研修室
	公募研究発表会[JADS 第 54 回研究会]
10:00-10:30	奥本素子 (総合研究大学院大学) 「デジタルアーカイブの公開と活用—教育普及活動へのデジタルアーカイブの活用と課題」
10:30-11:00	吉川恵子 (2006年東近美インターン・慶應義塾大学大学院), 長屋俊 (2006年東近美インターン・独立行政法人日本原子力研究開発機構), 水谷長志 (独立行政法人国立美術館) 「展覧会カタログに関する言説の系譜的研究の試み」
11:00-11:30	森仁史 (山鬼文庫), 堀越洋一郎 (武蔵野美術大学造形学部) 「日本の美術雑誌—永遠の経過報告」
11:30-12:00	波多野宏之 (駿河台大学文化情報学部) 「アート・ドキュメンテーションの教育と研修—大学院レベルでの現職研修の可能性を求めて」
12:15-	第 18 回 (2007 年度) 総会
14:30-	国立新美術館情報資料関連施設見学会[JADS 第 39 回見学会]
15:30頃	散会

第53回研究会 シンポジウム

水谷長志__独立行政法人国立美術館情報企画室長

安斎利洋__システムアーティスト

前田富士男__慶應義塾大学文学部教授，同大学アート・
センター所長

丸川雄三__国立情報学研究所特任准教授，独立行政法人
国立美術館情報企画室客員研究員

金子郁容__慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教
授，同大学湘南藤沢メディアセンター所長

シンポジウム

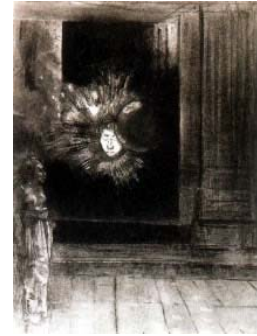
発現するドキュメンテーション 蓄積と検索から表現へ *Documentation as apparition: from storage and retrieval to 'expression'*

イントロダクション

水谷 長志

独立行政法人国立美術館情報企画室長

収集し組織化してクエリー (*query*、問い合わせ) を待つ、クエリーが投げかけられなければ、動かない：動き出さないデータベース、ではなく、集積され組織化されるもの、それ自体：総体が、自ら発現し表現をめざすようなドキュメンテーション。観る者が、集積の個々と全体を把握しつつ感応できるようなドキュメンテーション、は可能か、意味はあるか。2007年1月誕生の5番目の国立美術館、国立新美術館において、アート・ドキュメンテーションのあらたな可能性に向けて「発現(*apparition*)」をキーワードにシンポジウムを開催いたします。



Redon, *Apparition*, 1883

発現=*apparition* は、オディロン・ルドンの作品題名（出現ないし顕現の訳が多い）から想を得ています。薄暗い空間から立ち現れる、出現する何かのイメージをドキュメンテーションされたものの総体から、例えば大図書館あるいは綿密精緻な手業になるカードの大群から感じとることはないでしょうか。一冊の図書を一枚の葉に、棚を枝に、書架を一本の樹木に喩えれば、図書館は森厳な森となり、森の暗闇から木霊がささやきかける。

図書館に見られるドキュメンテーションされた総体は、常に「場所の感覚」（トポス）を抱え、近づく者を包み、インスピレーション（連想）を与えてきました。

今日、最大の知識空間である Web の世界を検索するとき、そこにドキュメンテーションされた総体を感じることはありません。あるのは、白々とした画面の中央に口を空けて問い合わせを待つボックスばかりです。しかも、語（word）としてクエリーを投げかけなければ、その場は動き出さない。予感を与えることすらないこの白い画面を前に、立ちすくむような、漠然とした恐れを感じたことはないでしょうか。

検索という行為は、外界にあるものへのアプローチの以前に、まず自己の内面、記憶への問いかけから始まります。「頭に釣り糸を垂らす」（宮崎駿）ことで、外界への問い合わせに用いる語なり、フレーズ、あるいは形にはならない予感の始まりを手繰り寄せてくる、つまり、求めるものを「想起」する行為が始点にあります。

「想起」を誘うドキュメンテーション、検索者に予兆を与えて動き出すような「発現」するドキュメンテーションを考えたいと望みました。白々とした画面を膜として、「想起」と「発現」の二つのベクトルが交差する、そんなドキュメンテーションとそのアクセスは可能か、意味はあるか？

今回、このようなテーマにご賛同いただいた4名のパネリストのみなさん、そしてフロアの出席の方々とともに、予定調和的ではなく、新しいドキュメンテーションの可能性を模索するシンポジウムになることを願っています。

カンブリアンゲーム——作動するテキスト

安齋利洋

システムアーティスト

1990年代、私（安齋）と中村理恵子は、複数の作者による対話的な創作形式である連画の実験を行ってきました。それは、作者の牙城の中で生成される絵画という作品形式を、テキストという開いた織物の中に解き放つ運動でもありました。

今日、インターネット上のウェブ、ブログ、ソーシャルネットなどが日常に浸透するなか、テキストは発生したその場で人々の反応にさらされ、即時的に作動を開始するのが常態となりつつあります。テキストは記述し終わったデータではなく、書き換えの連鎖を引き起こすリンクしあった機械群として、その本質を拡張しはじめています。

私たちは現在、作動するテキストである「カンブリアン・ゲーム」という創作形式を考案し、インターネット上のセッションやワークショップで活動を展開しています。それはテキストの未来を予見する、プロトタイプであると考えています。

1956年生まれ。システムアーティスト。1985年ごろからCG作家として活動するかたわら、ペイントシステム「スーパー・タブロー」を開発する。1990年ごろからCGによるコラボレーション「連画プロジェクト」を中村理恵子と開始する。また、プラネタリウム描画環境「マジック・ケプラー」、P2Pペイントシステム「Interwall」など、コラボレーションシステムの技術開発を行う。2000年ごろから、グラフ構造コラボレーション空間「カンブリアンマシン」を開発するとともに、カンブリアンゲームのセッション、ワークショップを多数行っている。「顔ポイエーシス」などのアルゴリズム作品もあり、創作とシステムの関係に、一貫した関心をもっている。

メタファーとカップリング——アート・アーカイヴにおける時空間

前田富士男

慶應義塾大学文学部教授、同大学アート・センター所長

美術作品・造形資料は、絵画・写真・画像から、彫刻・工芸・環境デザインに、また庭園や建築を包括する。ごく単純に、絵画と彫刻とを比較してみよう。このふたつの表現領域は、線・明暗・色彩からなる平面作品と、塊量・面からなる立体作品として、およそ異なったオーダーをもつ。さらに、内部空間をもち、そこでの行動を前提とする立体作品としての建築を想起してもよい。ひとくちに「造形作品」といっても、これらのオーダー、本質的に異なったオーダーは、本来、共通項でくくることができないのかもしれない。われわれのごく当たり前の感性の働きを思いおこしても、絵画を前にするときと、彫刻にふれているとき、あるいは建築の中にいるとき、われわれは自由自在に感性の作動を組み替えているといっただけよい。まして、造形資料に関する「研究」や「情報」とは言語メディアにもとづく表現である。線・明暗・色彩・塊量・内部空間といった感性的対象のゆたかな内実に比して、言語とはおそろしく別様なメディアでしかない。とうてい造形資料の諸オーダーがもつ多岐多様な表情をとりおさえきれない。

むしろ、諸オーダーやメディアの優劣が問題なのではない。諸オーダー／メディアにまたがる共通項を、制作者・作品名・制作年といった指標に、あるいは、高精細度の画像に、といったコンテクスト化に求めることはいったんストップしてみよう。それでもなお、相異なったオーダー／メディアを「相即的(kohärent)」に接続する道筋がありうる。それをカップリングと呼ぶ。カップリングやメタファーの視点から、造形資料や言語メディアを再把握することが、「発現」へむかうひとつの方途である。

1944 年生まれ。慶應義塾大学工学部管理工学科卒業後、同大学文学部美学美術史学専攻に学士入学。同大学院文学研究科美学美術史学専攻博士課程単位取得退学。神奈川県立近代美術館、ドイツ・ボン大学美術史研究所、北里大学をへて、慶應義塾大学文学部美学美術史学専攻。現職：慶應義塾大学文学部教授・慶應義塾大学アート・センター所長・日本学術会議会員。専門領域：西洋近代美術史・芸術学。著訳書に『朝日美術館・パウル・クレー』（編著、朝日新聞社、1995）。『ゲーテ・色彩論（完訳版）』（共訳、工作舎、1999）。『伝統と象徴——美術史のマトリックス』（編著、沖積舎、2003）ほか。

連想がつなぐ文化財の情報発信

丸川雄三

国立情報学研究所特任准教授、独立行政法人国立美術館情報企画室客員研究員

本講演では、これまでに私がシステム構築に携わった文化財情報発信の事例をいくつか紹介いたします。

「文化遺産オンライン」は文書と文書のつながりを単語の重なり度合によって計算する「連想計算」を用いて、ユーザーが自分の興味や目的に応じて文化財を探ることができる連想検索サービスです。「国立美術館・遊歩館」は国立美術館 4 館総合目録の情報をテーマ別に画像とともに紹介する仮想リーフレットです。「想・IMAGINE」は複数のデータベースを同時に連想検索できる連想検索統合サービスの総称です。このうち文化財情報を中心とした発信事例について紹介いたします。

文化財の価値はそこに在るだけでは完結せず、受け手が存在して初めて成立するものだと思います。そのような文物の情報発信にあたっては、受け手側が自由な切り口で作品に触れられること、また多様なとらえ方ができることが重要だと考えています。

2003 年東京工業大学大学院計算工学専攻博士課程修了，博士（工学）。学生時代の専門は遺跡探査。その後，特許検索にかかる情報処理技術の研究開発を経て，現在は主に文化財情報発信技術の研究開発に従事。文化庁文化遺産オンラインへの技術協力など，連想の情報学を生かした新しいサービスの実現に力を入れている。

想起する街——図書街プロジェクト

金子郁容

慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科教授、同大学湘南藤沢メディアセンター所長

人類の知的・文化的活動の資産は世界中に分散的に存在しています。ネット上にオープンな「知の編集空間」を構築して、それらを結びつけ、関連づけるのが図書街です。ICTの多様な展開に向けて、新しいデータモデルや連想技術を開発し、ユニバーサル・コミュニケーションを促進することを目指します。このプロジェクトでは、「書物」をあらゆる情報の基本単位ととらえます。しかし、図書街は、電子図書館ではありません。「本棚」が「道」「界限」「広場」など、直観的な街オブジェクトを使って、書物のもつ多義的な関係性を自由に編集して、文脈をもった関係空間を作るといことです。道に沿って並ぶ本棚は、たとえば、明治・大正・昭和と、その中の書物の時代やテーマがだんだん変わって行くという文脈を表しています。この「街」には、書物があふれ、人が住み、利用者が訪れ、街を散歩し、特定の知識を探し、連想し、インスピレーションを働かせる。そして、この空間は、ブックカフェ、学校、地域文化の拠点、観光ナビゲーションなど、さまざまな現実システムと連動する予定です。

1948年東京都生まれ。慶應義塾大学工学部卒。スタンフォード大学 Ph.D. (工学博士号)。ウィスコンシン大学経営工学科、計算機学科併任準教授をつとめるなど、アメリカ、ヨーロッパで12年間過ごし帰国。エッセン大学(西ドイツ)客員教授、統計数理研究所客員教授などを歴任。一橋大学商学部教授を経て94年4月より現職。99年4月から2002年9月まで、慶應義塾幼稚舎舎長兼任。専門は情報組織論、ネットワーク論、コミュニティ論。ボランティアな組織原理とコミュニティ・ソリューションの可能性を探ることに関心がある。ソーシャルイノベーションにも注目している。教育改革国民会議委員となったことが契機となり、近年は、初等中等教育システムに関心をもつ。地域コミュニティが作り、運営する新しいタイプの学校である『コミュニティ・スクール』を2000年に提案し、その後、総合規制改革会議等を通じて法制化を推進する。2005年度の法制化後、各地でコミュニティ・スクールの立ち上げや運営の支援をしている。長野県教育委員(2006年11月まで)、文科省バウチャー研究会委員、文科省学校評価システム研究会委員、構造改革特区評価委員教育部会長、総務省「ネット利用の安全と未来推進会議」主査、総務省「次世代ネットアーキテクチャー検討委員会」、など。主な著書『ネットワーク組織論』(岩波書店 共著)、『ボランティア もうひとつの情報社会』(岩波新書)、『ボランティア経済の誕生』(実業の日本社 共著)、『新版コミュニティ・ソリューション ボランティアな問題解決にむけて』(岩波書店) 他多数。

デジタルアーカイブの公開と活用—教育普及活動へのデジタル
アーカイブの活用と課題

奥本素子__総合研究大学院大学

展覧会カタログに関する言説の系譜的研究の試み

吉川恵子__2006年東近美インターン・慶應義塾大学大学院

長屋俊__2006年東近美インターン・独立行政法人日本原子
力研究開発機構

水谷長志__独立行政法人国立美術館

日本の美術雑誌—永遠の経過報告

森仁史__山鬼文庫

堀越洋一郎__武蔵野美術大学造形学部

アート・ドキュメンテーションの教育と研修—大学院レベル
での現職研修の可能性を求めて

波多野宏之__駿河台大学文化情報学部

デジタルアーカイブの公開と活用 —教育普及活動へのデジタルアーカイブの活用と課題—

総合研究大学院大学 奥本 素子

高度に情報化する社会の中で、博物館事業においても様々な面で ICT（情報通信技術）が取り入れられるようになった。現在では、博物館の外部への業務である、教育普及の業務でも ICT を積極的に活用する動きが出始めている（デジタルアーカイブ推進協議会，2005）。ICT が教育普及事業に活用されるようになった背景には、昨今の教育普及事業の重要性が増加と関連していると思われる。日本で唯一の博物館の総合的な団体である財団法人日本博物館協会はその報告書の中で、教育普及事業の充実、外部との連携を今後の博物館の目指すべき方向として位置付けている（日本博物館協会，2000）

しかしながら、実際の博物館現場ではそのような機能が本当に活用されているのだろうか。2006年の秋に我々が全国の美術館博物館を対象に『博物館・美術館における電子画像利用の実態調査』と題し、質問紙調査を行った。調査対象館はデジタルアーカイブ推進協議会のホームページ（<http://www.dcaj.org/jdaa/url/02.html>）にホームページアドレスが掲載されている博物館・美術館の中からメールアドレスが分かった 700 館、ホームページから直接メールが送れる 87 館、Fax が送信できた 89 館の合計 877 館である。アンケート方法はウェブ上に設置した調査票（<http://reas2.nime.ac.jp/cgi-bin/WebObjects/REAS?t=01599>）に、情報業務担当者、もしくはそれに準ずる責任者に回答してもらった。有効回答数は 242 館（回収率 28%）であった。このアンケートより、博物館・美術館のデジタルアーカイブの教育活用実態というものが明らかになった。

まず、博物館の中でデジタル画像を公開している割合は、「公開」と答えた館は 9%、「一部のみ公開」と答えた館は 25%であった（合計 34%）。また、デジタル画像をオンライン上で公開している割合は、「公開」と答えた館は 7%で、「一部のみ公開」と答えた館は 58%であった。このことから、デジタル画像の公開は館内端末での公開より、館外向けのオンライン上での公開の方が盛んなことが分かる。さらにすべての画像を公開している館は、どちらも 1 割未満と非常に少なく、デジタル画像を公開する際も、限定的な公開だということが分かる。

さらに公開の状況をオンライン上で公開している（一部公開も含む）と答えた館のみで分析してみると、解説付きで公開している割合は、「解説付き」が 16%、「一部解説付き」が 68%であった。一部解説付きの割合が高いものの、まだまだ限定的な点が今後の課題だと考えられる。

また全体的にズームや 3D などウェブならではの機能と共に公開している割合は、「多機能あり」が 2%、「一部のみ」が 11%で全体の 2 割以下しかウェブのインタラクティブな機能を活用していないことが分った。加えてデータベースを公開している割合は、「データベース公開あり」が 7%で、「一部のみ」が 19%であり、こちらも 2 割強の割合程度である。

以上のことから、現在オンライン上や館内で公開されているデジタル画像に関して、閲覧者は限定的にしか情報を得られないことが分かる。これは教育目的でデジタル画像を活用する際の大きな課題である。

さらに、実際に「ウェブページに閲覧者の教育啓蒙を目的としたページがある」と答えた館は全体の 32%（78 館）にとどまった。本研究では、教育ページがあると回答した 78 館中、現在教育用コンテンツが見られるウェブページ 70 館を分析した。その結果、教育ページのコンテンツは以下のように分類できた（表 1）。またその分類から、どのようなコンテンツが教育ウェブページとして認識されているかを表にまとめた（表 2）。

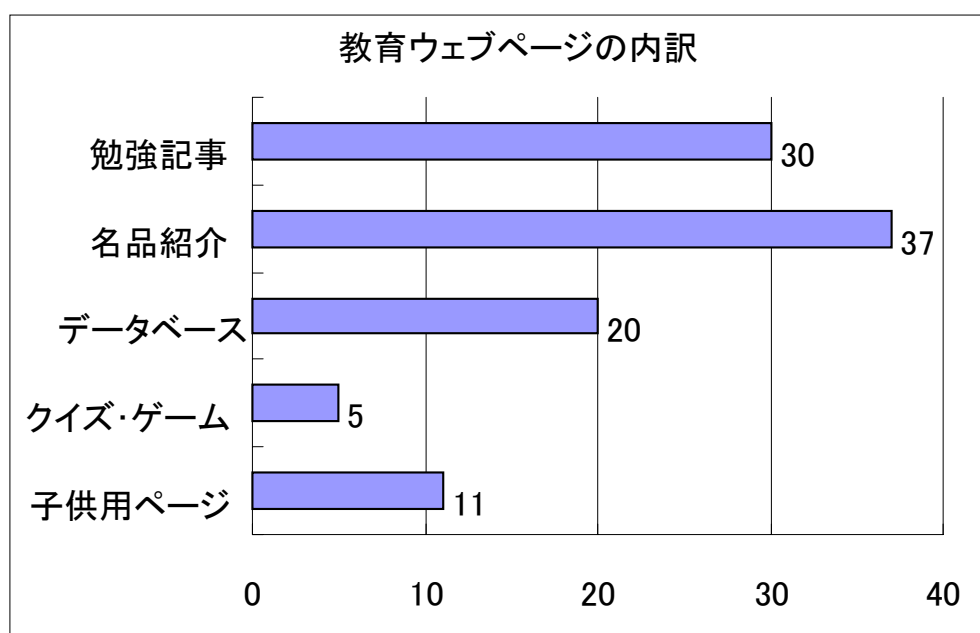
これらの調査によると、現在の博物館での教育ウェブページは、名品紹介や勉強ページなど、博物館主体の教育ページが多い。名品紹介に関しては、解説有のページが 30 館で、解説なしのページが 7 館であった。またデータベースを公開している館のうち、半分は解説がついていなかった。

以上の調査から、現在の教育ウェブページと考えられているページの内容では、博物館側の一方的な情報提供になってしまっており、学習者側の視点に立ってページが開発されていないのではないかと考えられる。また学習者主体で検索するデータベースに関しても、解説が不十分なのが実態のようだ。今後は、博物館の教育ウェブページは、博物館学習者の学習支援に結びつくような試みが必要であろう。

表1 教育ウェブページ分類

子供用ページ	子供用と明記してあるページ
クイズ・ゲーム	クイズやゲームなど、インタラクティブな機能がページ
収蔵品データベース	収蔵品を検索できるデータベースがあるページ
名品紹介	博物館側が紹介する館蔵品をピックアップしているページ
勉強ページ	収蔵品に関わるトピックの解説ページ

表2 教育ウェブページ分類に基づく内訳



参考文献

デジタルアーカイブ推進協議会 (2005) デジタルアーカイブ白書 2005, 株式会社トランス
アート

日本博物館協会 (2000) 「対話と連携」の博物館、財団法人日本博物館協会

展覧会カタログに関する言説の系譜的研究の試み

吉川 恵子 (2006年度東京国立近代美術館インターン/慶應義塾大学大学院文学研究科修士課程図書館・情報学専攻)

長屋 俊 (2006年度東京国立近代美術館インターン/独立行政法人日本原子力研究開発機構研究技術情報部)

水谷 長志 (独立行政法人国立美術館/東京国立近代美術館)

はじめに

展覧会カタログは、その資料価値、美術図書館における位置、収集から整理・提供に至る困難などあらためてその一々を繰り返すまでもなく、アート・ドキュメンテーションの文脈において、もっとも多く論じられてきた資料である。アート・ドキュメンテーション学会(以下JADS)の草創期、収集と整理という二つのワーキンググループが活動したが、どちらにおいても展覧会カタログは検討のメスを入れるべき対象として取り上げられた。

JADSがいまだ会誌『研究』を持つ以前の1990年、アート・ドキュメンテーションを特集した『現代の図書館』(JLA)に美術ドキュメンタリストを肩書きに持つ中島理壽は「日本の展覧会カタログについての一考察」を書き、『研究』創刊号(1992)においては、「展覧会カタログの情報管理」(嘉数他)と並んで、故種市正晴が「美術分野における灰色文献」として「君臨」する展覧会カタログを語って、後にカタログ専門図書館であるアートカタログ・ライブラリー(Ace Japan)を担った。さらにそのニュース誌に「展覧会カタログに関する主要日本語文献」を編んでおり、<http://www.acejapan.or.jp/acl/ln01-07.html>から閲覧できる。

展覧会カタログに関する言説をまとめたものとしては、この種市書誌とその継承版と言えるJADSサイトの関係文献目録「G-2_展覧会カタログ」がもっとも精緻かつ網羅的であろう。ただし、金井紫雲が昭和2年に『アトリエ』に寄せた「発売禁止のプログラム」から始まる種市書誌もJADS版も、ただ時系列に関連文献を配しているにすぎない。

2006年度東京国立近代美術館インターンの2名を含む筆者らは、200件を越す言説について、あらためてテーマを精査し、展覧会カタログを論ずる切り口を抽出して、だれが、いつ、どこで、何を語ってきたかを見

直す作業を行った。あわせて展覧会カタログに関わる言説の主題書誌を東京国立近代美術館アートライブラリーのサイトに掲出した。

<http://www.momat.go.jp/art-library/art-library-guide/guide.html>

1. 研究の目的

本研究の目的は、「展覧会カタログに関する言説の系譜的研究」であり、具体的には、次の3点を課題として作業を進めた。

- ① 言説の分類書誌の作成
- ② 言説の傾向・特性の描出
- ③ 掲載媒体のランキングに基づくコア・ジャーナルの特定

2. 研究の方法

多様な媒体の中から、文字媒体、すなわちテキスト群を主情報源と定めた。新聞・雑誌等の記事を対象として言説の分析を行った。

3. 分析の対象

次の3種の情報源に掲載されたテキスト群を分析の対象とした。

① 「種市リスト」

故種市正晴氏の収集によるもので、前記「展覧会カタログに関する主要日本語文献」の素材となったファイルから作成したリスト。1927～1998(集計対象は1960～1998)

② 「JADSリスト」

本学会の文献情報委員会によるもので、「アート・ドキュメンテーション関係文献目録」の分類索引でのG_特殊資料群>G-2_展覧会カタログに関わるもの。1982～2006(集計対象は1982～2006)

<http://www.jads.org/pub/ref/index/G.html#G-2>

③ 「今橋リスト」

今橋映子編著『展覧会カタログの愉しみ』東京大学出版会、2003の巻末文献リスト。1982～2002（集計対象は1993～2002）

各情報源に記載されたテキストから、リスト間の重複を除き、web情報のプリントアウトや日本語以外の文献を除いた231件から分析対象を求めた。

4. 分析の手法

言説の傾向・特性の描出は、経時的観点から試みた。書誌作成の段階で分類用キーワードを作成し、テキストに付与した。時系列に従ってキーワード数を計量し、グラフ化した。

コア・ジャーナルの特定については、書誌の掲載誌名からランキングを行った。

5. 分析の手順

① 予備作業：分類用キーワードの作成

本テーマの分類に利用可能な既存の分類表やシソーラスは存在しなかった。そのため、作業は分類用キーワードの作成から着手した。複数の担当者が、収集したテキスト群の一部を読み、キーワード候補を作成した。その後、担当者間でキーワードを調整して分類表を作成した。キーワード作成にあたっては、階層性による展開の可能性に留意した。最終的に8種の大分類の下に、合計57種のキーワードを作成した。

② 本作業：キーワード付与

テキスト群を読み、キーワードを付与した。キーワード付与は排他的には行わず、1つのテキストに複数のキーワードを認めた。この作業に基づき、③集計・⑧分類書誌作成を行った。①のキーワード作成、②のキーワード付与とも、専ら人力で行い、機械的処理は行わなかった。

③ 集計

結果をカウントし、キーワードの出現を集計し、分析用に加工した。

④ 経時的分析

集計結果をグラフ化し、分析を試みた。

⑤ コア・ジャーナルの特定

あわせてテキスト掲載誌のランキング表を作成し、コア・ジャーナルの特定を行った。10年毎の区分での掲載誌の遷移描出も試みた。

⑥ 評価・再分析

④、⑤の結果を評価し必要に応じて再分析を行った。

⑦ 考察

⑥の結果の考察を行った。

⑧ 分類書誌の作成

②で付与されたキーワードに基づき、分類書誌を作成した。

6. 分析の結果および考察

① 言説の分析

当初のテキスト群全体の集計結果、1990年半ばから後半にかけて「アートライブラリ」の件数が顕著に増加する。これは情報源のうち「種市ファイル」のうち1冊が「アートカタログ・ライブラリーのアーカイブ」的な特性をもつことに由来する異常値と考える。そのため、テキスト群から「アートカタログ・ライブラリー」に関するテキストを除いたデータ184点に基づき、再集計した。

② コア・ジャーナルの特定

①と同様に「アートカタログ・ライブラリー」に関するテキストを除いたデータ184点に基づいたジャーナル・ランキングを作成した。

③ 数に関する考察

90年代後半からテキスト数が減少する。当該時期は、本研究の情報源が「種市ファイル」から「JADS リスト」に移行する時期であり、両情報源のテキスト収集ポリシーの差異が反映したものとと思われる。

7. 結論

本研究で得られた結論は次の通りである。

① 文献数の遷移

情報源の違いによるポリシーの差が反映した。全体を見渡すためには、改めて網羅的な文献収集が必要である。

② キーワードの出現に関する特徴

時事性・事件性の強いキーワード（例、「事件ーフジタ」「事件ー富山県立近代美術館」）を除いては、キーワードは満遍なく出現する。

③ コア・ジャーナルの特定

ランキング作成の結果、テキスト群全体では、展覧会カタログに関するコア・ジャーナルを特定した。また、10年毎の区分での掲載誌の遷移が提示された。

④ 成果物

本研究の成果物として、次のものが得られた。

・分類に用いたキーワードのリスト

・本研究の素材とした、展覧会カタログに関するテキスト類の分類書誌

・掲載誌のランキング表

これらを web 上に掲載し、閲覧可能とした。

おわりに

最後に 3 つの議論を提示して、今後の課題とする。

① テキストの網羅性

本研究が素材とした 3 種の情報源は「展覧会カタログに関する言説」のすべてを網羅するものではない。テキストの出版年による制約をはじめ、作成された書誌は今後も「展覧会カタログに関する言説」が出現する限り、追補・改定されるべきものである。その意味では本研究で求めるものは、永遠に未完のものといえよう。

② 分析手法の問題

さまざまな制約により、本研究は分類において「人力による作業」によらざるを得なかった。一方、情報学・言語学の分野では、計量書誌学やテキストマイニングの手法が多く提案、研究されている。

同じ「展覧会カタログの言説」のテキスト群を対象にして、機械的な手法では、どのような結論が得られるのか。人力とのメリット・デメリットはどのようなものがあるのか、という点は大変興味深い。その他本研究の素材を更に加工した分析の可能性もある。

③ 分類の問題

本研究が提示した分類表も、今後の状況によりいつそう洗練され、時代の趨勢に応じた形に改定されることが予想される。

その意味では、①のテキスト群と同様、本研究で作成した「分類表」も永遠に未完でありつづけるものである。

分類表

1 図書館

- 101 アートライブラリ・美術図書館学
- 102 活動
- 103 収集
- 104 整理
- 105 所蔵
- 106 保存
- 107 利用・提供
- 108 図書館員
- 109 書誌情報

2 海外事例

- 201 紹介
- 202 対比

3 内容・構成

- 301 解説一般
- 302 記述言語(バイリンガル)
- 303 作品解説
- 304 作家解説・年譜
- 305 参考文献リスト
- 306 出品リスト
- 307 図版
- 308 論文
- 309 文章・読みやすさ

4 資料価値・研究史・利用者

- 401 編著者
- 402 意味・定義
- 403 研究史(言説の系譜)
- 404 資料価値
- 405 成立史
- 406 専門性
- 407 展覧会の記録
- 408 自立した資料
- 409 資料保存

5 編集・制作・デザイン

- 501 利用者
- 502 執筆者・制作者・発行者
- 503 作成時間
- 504 デザイン・装丁
- 505 デザイン・装丁—豪華化
- 506 デザイン・装丁—ユニーク
- 507 制作・発行一般
- 508 電算化
- 509 媒体
- 510 著作権

6 流通

- 601 古書・古書店
- 602 出版
- 603 市販・再版せず
- 604 発行部数・販売数
- 605 価格

7 社会問題・事件

- 701 改善(図録フェア・通信販売・専門店)
- 702 事件—フジタ
- 703 事件—富山近美
- 704 芸術政策・美術館行政
- 705 その他時評・社会環境
- 706 表現の自由
- 707 展覧会主催者(メセナ)
- 708 著作権

8 その他

- 801 カタログの展示
- 802 カタログ批評
- 803 コンクール
- 804 展覧会企画
- 805 個人—収集・保存

森仁史（山鬼文庫）・堀越洋一郎（武蔵野美術大学）

1 調査までの経緯

JADS 会員の SIG として美術雑誌を調査しようと考えたのは日本近代音楽館による 1999 年の展覧会「日本の音楽雑誌 100 年」〔旧東京音楽学校奏楽堂 1 階展示室〕と目録に相当する『日本の音楽雑誌解題集 1』（1999 年 日本近代音楽館）がヒントになった。後者は雑誌の主張や性格を物語る事項に配慮していることで魅力的な編集内容であった。また、JADS でも既に 1994 年第 1 回アート・ドキュメンテーション研究フォーラム〔国立国会図書館〕において、水谷長志と中村節子を中心となって美術雑誌の展示を行い目録を作成した。これは 1997 年 7 月 ars-WG1997 年度連続講座第 2 講「美術雑誌と ars」と題して中村が報告し、研究文献目録（中村節子編「美術雑誌:主要文献目録(稿)」)、『ars の現場とツールの諸相 II—1997/8 年度アート・ドキュメンテーション研究会 ars-WG 活動報告』2000 年 p.17-22 掲載）を発表した。

明治美術学会を始めとする近代日本美術史研究の進展によって、明治以降発行された雑誌が研究資料としてきわめて重要であることが改めて認識されるようになってきていたが、その目録としては東京都美術館が編集した『美術雑誌目録』（1987,1992 年）があるくらいだった。しかもこれは所蔵目録であって、美術雑誌全体を対象としたものではなかった。ただ、1987 年版は創刊号表紙図版、編集人、大きさ、総目次などを付し、美術雑誌の内容傾向を知る上でよい手がかりを提供していたので、もし美術雑誌を調査するのであればこうした基本的書誌事項以外の雑誌の性格を知ることのできる事項についての記録が欠かせないのではないかと考えて SIG メンバーに共通認識があった。また、研究への貢献という観点から、戦前期の美術雑誌について精力的に調査することが妥当だと判断した。

戦前には次のような僅かな先行調査があるばかりで、美術雑誌の全体像を把握するには程遠い状態であった。

白木正光「美術雑誌の変遷」（上）、（下）『中央美術』（2-7 大正 1 年 7,8 月）

森口多里「明治美術文献鈔（1）明治前半期の美術雑誌」『アトリエ』（16-12 昭和 14 年 11 月）

美術研究所編『定期刊行物調査表』座右宝刊行会 昭和 16 年

浦崎永錫「美術雑誌統制物語」（上）、（下）『宣伝』（8719,8720 昭和 16 年 11,12 月）

我々の調査とはほぼ同時期の 2000 年 3 月に『美術雑誌目次総覧』全 4 巻（国書刊行会）が刊行されたが、我々が期待するのとは異なり、多くが既に公にされた目次の集成であって、美術雑誌の概念や領域設定について踏み込もうとするものではなかったため、やはり新規に調査を始めなければならないと意を強くした。

また、東京大学総合研究博物館は 1995-98 年の学振科研費及び鹿島美術財団の助成によって美術雑誌データベースを作成し、ウェブ・サイトに公開していた。これは 53 タイトル、2500 冊の画像を蓄積したものであるが、この趣旨と内容も我々が求めるものとは狙いが異なっていた。

幸いにして、2000、2001 年度にポーラ美術振興財団から研究助成（代表：青木茂）を受けることができ、研究会や見学を実施することができた。この当時の参加メンバー（所属はこの当時）は次の通りである。

青木茂（町田市立国際版画美術館）、内呂博之（東京藝術大学大学院）、大江長二郎（東京造形大学図書館）、金井紀子（神戸市立博物館）、川口雅子（東京藝術大学大学美術館）、小原由美子（国立西洋美術館）、住広昭子（東京国立博物館）、中村節子（プリヂストン美術館）、中村節子（東京国立文化財研究所）、橋本優子（宇都宮美術館）、堀越洋一郎（国立西洋美術館）、星野悦子、広江重徳、森仁史（松戸市教育委員会）、梁瀬三千代（慶應義塾大学三田

メディアセンター) (50音順)

2 作業の進行と課題

上記の美術雑誌目録のほか幾つかの目録、『日本美術年鑑』などをもとに堀越が第一次チェックリストを作成し、これに地域や施設に担当者を次のように割り振って、逐次補充入力することから始めた。これに際しては、美術研究の動向を考慮して純粋美術に限定せず、工芸、デザイン、写真の領域を含めることとした。しかし、この時点で既に調査の進行していることが判明していた版画、建築については除外することとした。

大阪・中之島図書館(金井紀子)、東京芸術大学付属図書館(内呂博之)、慶應義塾大学(梁瀬三千代)、デザイン関係(大江長二郎)、神奈川県立近代文学館(小原由美子)、宇都宮美術館・枝村文庫、工学院大学図書館・今和次郎文庫(橋本優子)、女子美術大学図書館(星野悦子)、東京国立博物館(住広昭子)

また会員外であったが、特殊なコレクションを所蔵することが分かっていた次の美術館学芸員に対し協力を要請し、目次、創刊の辞などのコピー提供の便宜を受けた。両者はともに地方美術館であるが、これは地域の美術史や近代美術における特定のテーマについて重要な研究成果を彼らが蓄積してきていることを物語っている。

井上芳子(和歌山県立近代美術館)、佐々木千恵(倉敷市立美術館)

最初に議論となったのが何を以って美術雑誌とするかであった。はじめに予想したのは美術団体が画集代わりに発行する雑誌形態の発行物は除外しようということであった。なぜなら、我々が求める雑誌の利用価値は研究資料として、歴史的ドキュメントとしての有用性であって、ビジュアルな印刷物としての価値ではなかったからである。そのため、美術雑誌全般(中村節子)、写真雑誌(金子隆一)、印刷技術(岩切信一郎)、デザイン工芸雑誌(森)について具体的にどのような雑誌が対象となるのか研究会で検討し、議論した。また、枝村文庫(宇都宮美術館)や青木文庫(西那須野町)を実地に見学して、雑誌の形態や内容について理解を深めることに務めた。

調査の過程で、目録作成を目指して作業を開始していた東京国立文化財研究所情報資料部からデータ利用の便宜を図っていただくことができ、大幅に作業が進捗した。また、岩波書店が所蔵する創刊号コレクションに幾つかの稀購本が含まれていることが分かり、この調査が許されたことにより情報を効率的に集めることができた。これらについてはその後次のような成果が公刊されている。

東京文化財研究所情報調整室資料閲覧室編『東京文化財研究所所蔵目録』5和雑誌目録編(上)、(下) 東京文化財研究所 2005年

うらわ美術館・岩波書店編集部編『創刊号のパノラマ』岩波書店 2004年

しかし、これらもあくまで所蔵目録であって、美術雑誌の定義に照らした確認は具体的に個々の雑誌当たらずにはならず、依然として課題として残された。美術を中心的に取り上げているという意味では当初は文学雑誌であったものが、美術史上重要な意味を持つ場合もある。(『白樺』、『塔影』、『早稲田文学』...) 反対に、美術作家が数多く参加しても文学雑誌的な内容が変わらなかったものもある。(『屋上庭園』、『雑記帳』...) 従って、リストに加えるべきかどうかは個々の雑誌の記述内容によって判断するほかはなく、そのフィルタリングの後にSIGメンバーにリストを示し、意見を求め修正して第2次リストを作成した。この時点で確認できたタイトル数は約1200で、これは予想の2倍程であった。

さらにこれ以外にも、古書市場や共同研究担当者から情報が集まり、当初予想していた以上の数量になった。同時期に、メンバーに人事異動が相次ぎが職場が変わり、継続していた調査が中断を余儀なくされるとともに、集まった情報が予想以上に数量が多くそのデータベース化が追いつかない状況になった。しかも、その間積極的な調査を進められない状態でも幾つかの雑誌について情報が追加される状態が続いた。

調査のなかで誌名変遷を追うことも期待したが、殆どの場合終刊を確認するのは非常に困難であることが分かった。このためもあって、創刊の辞などを含めてできるだけ正確に記録することを第一義とし、調査に当たってできるだけ創刊号を確認するようにした。

3 最終フォーマットとデータベース作成上の問題点

第1次チェックリスト作成時から、データベース化のソフトウェアとしては **FileMaker Pro.** を使用している。書影（表紙、創刊の辞など）をデジタルカメラで撮影し、書誌事項と共に記録する計画を最初からもっていたこともあり、PC 上で文字データと画像データを一緒に扱える点で、採用を決めた。メンバーからの文字データの提供時は **Excel** ファイルであることが多かったが、その取り込みも容易であり、項目の追加の容易さ、印刷用レイアウトを用途に応じ複数作成することが出来る点も利点であった。印刷用レイアウトについては、カラープリンタを使用した書影付のリストを前述のポーラ美術振興財団の助成報告書、および「創刊号のパノラマ」展（2004年 うらわ美術館）会場内での閲覧用リストで活用した。

現在、収録している項目（フィールド数）は 64 で、誌名、誌名ヨミ、出版者、編集人、書影画像などであるが、その雑誌の情報源（蔵書目録、現物購入など）、報告者なども項目に入れて複数のメンバーや情報提供者へ後日あたる際の備忘としている。また、所蔵注記として、所蔵書目録名、WNACISIS Webcat 総合目録データベース WWW 検索サービスの所蔵調査結果も収録している。また、採録しても今回の収録範囲外については、区分項目を作成してマークを入れることとし、重複誌名以外はデータ自体を削除することとはしなかった。また、同一誌名表記異誌については、参照番号という項目に別の番号を振ることで対応している。

誌名とは別に、月刊美術雑誌、写真雑誌、などが付いているものも見受けられたがこれについては、誌名とは別に、冠称という項目を設けてそこに入力した。

公開にあたっては、文字データのみ公開することを予定しているが、web+PHP+DB という、画像も含め web 上で検索・表示が可能な仕組みが多く見られるようになってきているので、その点は課題としたい。

4 中間的結論

当初は日本で発行された総ての美術雑誌を網羅することを課題としようと考えたが、調査の過程でそれはきわめて難しいことが分かった。美術雑誌は同人的な発行形態もあるが、もっと多く確実に長く存在したものに画商によって発行された雑誌がある。これらは本質的には販売目録と何等変わりはないが、雑誌としての体裁を整えるために、殆どの場合画家や評論家の文章を掲載している。それらは場合によっては利用価値のある情報を含んでいることもあり、一概に無視することができない。しかも、一般には流通せず、多くは短命であった可能性が高い。美術品の流通が他の芸術ジャンルに較べれば換金性の高い性格を持っているため、この種のジャーナリズムの出現は常に一定以上存在している。従って、調査が精緻になればなるほど、トリビア的な存在を掬いあげなければならなくなるが見えてきた。

こうした事情が判明してきたため、美術雑誌の調査を現在の時点で一応終結させ、ウェブ・サイトに公表し、その概要を知らせることとした。それによって意外な疎漏も発見できるかもしれないが、多くはここで述べたような事情が付け加わるのではないかと考えている。

従って、本年度この調査成果の概要を JADS のサイト上に公開することで、一旦 SIG の調査を終結したい。今後は重要な情報が判明した時点で、適宜データ補充ができればと考えている。

アート・ドキュメンテーションの教育と研修 —大学院レベルでの現職研修の可能性を求めて—

波多野 宏之

(駿河台大学文化情報学部)

はじめに

1989年4月、JADSが活動を開始してほどこころから、体系的な研修体制を整えるべきとの声は強かった。その主だった動きを振り返ると次のようになる。

1994年11月、第1回アート・ドキュメンテーション研究フォーラムの研究発表総合テーマとして「アート・ドキュメンテーションの職能と教育」が掲げられた。これは、職能意識と教育の必要性を確認するものであった。

1997年6月、第26回研究会として開催した「シンポジウム：フランスにおける美術情報の普及と専門教育」では専門的教育制度の実例の一端に触れた。また、この年、調査委員会は関連団体の実施する研修について調査した。これらのことから、

2001年6月、JADS中期計画の一項目として研修をとりあげて、「研修委員会を立ち上げ、研修会実施の方向で検討する。実現に向けてのステップとして、行事・企画委員会を中心として年次ごとの研究会を長期的視点から計画的に組み立て、これが研修（委員会）に成長するような手立ても検討する。」ことが承認された。

2002年2月、「中期計画の“研修機能”を意識した初の実験的な企画」として開催された第36回研究会「めざせ！ミュージアムのライブラリアン」では、この分野で働くことを希望する多くの若者がいることが実感された。その後、他の組織（LIPER）と共催で、

2004年11月、第42回研究会「美術館・博物館・文書館の情報専門職制の開発と養成：現状と課題」を開催。さらに教育・研修を念頭においた「次世代JADSを考える会」などの活動があったが、実際の研修活動に結びつけるまでには至らなかった。そこで、JADS執行体制からいったん切り離して検討することとし、

2005年6月、有志による教育・研修SIGが形成され、JADS総会で承認された。論議は、

2007年3月、第51回研究会「日本のMLAとアート・ドキュメンテーション—教育・研修のあり方を考える—」においてSIGからの具体的な提案として公表された。

この発表では、上記に一貫して関わってきた立場から、主として教育・研修SIGでの論議およびこれをもとにした第51回研究会における提案内容を中心として報告し、更なる修正・補強のための示唆を得られれば幸いである。

1. 研修カリキュラム

体系的な研修を実現するためには、その内容、カリキュラムが重要である。その検討の素材としては、Paula Baxterの *International Bibliography of Art Librarianship* の分類項目をわが国のアート・ドキュメンテーション（以下、固有名詞等を除き、ADと略記）

の実情に合わせて修正した現行「アート・ドキュメンテーション文献目録」の項目を参考にしつつこれらを取捨選択し、新たな概念を加えて最初の「たたき台」(第一次案)とした。

以下に示すものは、第51回研究会での意見を反映し若干の修正や説明を加え、一部領域名称の表現を変更したものである。

なお、この案の前提として、「図書館情報学(司書)、博物館学(学芸員)教育をベースに、ADに特化した以下の領域について、ひとつまたは複数の領域をグルーピング化した科目を設定する」すなわち、一定の司書、学芸員教育を受けている者を対象としており、領域・科目のグルーピングもなお流動的なものとして提示している。

- ・アート・ドキュメンテーション総論 [理論・歴史、教育・研修、倫理、事情、協会・各館、経営]
- ・MLA 資料管理総論
- ・図書資料(資料論、組織化、制作・編集) [参考図書、展覧会カタログ、逐次刊行物等]
- ・オブジェクト・ドキュメンテーション/レジストレーション(資料論、組織化)
- ・画像ドキュメンテーション(資料論、組織化、制作・編集) [写真・マイクロ資料、ビデオ等]
- ・ドキュメンテーション(資料論、組織化) [エフェメラ、切り抜き等の諸資料による作品関係資料ファイルの形成など]
- ・レファレンス、アニメーション[利用者に対する諸活動、教育普及を含む]
- ・知的財産権、文化法、
- ・データベース、デジタル・アーカイブズ、情報検索
- ・(アート)アーカイブズ学
- ・主題科目*(芸術史)または(図像学)
- ・アート・ドキュメンテーション実習*

これらのうち、「必修(*)2科目、選択3科目、合計5科目10単位程度を当面の目標とするか?」というのが、SIGでの原案として最初に論議されたものであった。

2. 研修実現の方法

駿河台大学大学院現代情報文化研究科文化情報学専攻のカリキュラム(美術情報資源論特論等)や大阪大学コミュニケーションデザイン・センターの公開講座(アート・アーカイブズ概論)などでの教育実態を踏まえ、SIGでは、実現可能なAD研修の実施方法(案)として、JADSが研修会を新たに集中的に設定するのではなく、散在する既存の大学院講義等をネットワーク化する下記の案を提案している。

- ・JADSを中心とし、大学*(大学院)、美術館等より構成される<アート・ドキュメンテーション・カレッジ>(仮称)コンソーシアムを形成する。

* 科目(内容)によっては、学部科目を対象とすることも可能。

- ・JADS教育・研修SIGを発展させた委員会を組織し、コンソーシアムの本部とする。
- ・参加大学(大学院)、美術館等を募り、カレッジ構成ユニットとして認定する。

- ・各構成ユニットにおける既存の科目名は、カレッジ基本カリキュラムの科目に読み替え、所定の科目（単位）を修了した段階で JADS が修了証を授与する。
- ・カレッジ基本カリキュラムは、教育・研究 SIG 一次案を土台に、美術館（等）実習科目、主題科目等を加味し更に検討を加える。
- ・大学（大学院）に美術館従事者等外部講師を中心とした公開講座を設置し、学部（大学院生）在籍者は学内単位認定、外部受講者はカレッジ単位認定するシステムを導入する。
- ・修了必要単位数は、受講生の教育歴（特に司書資格、学芸員資格の有無）、実務経験年数に応じて 10～32 単位を想定する。

3. 研修の効果と受講生像

こうした教育・研修の効果としては、「AD に従事する者、もしくは従事を希望する者に教育・研修の機会を与え、そのレベルアップが図られる」「AD の専門職能を社会的に顕在化させる」「将来想定される『上級学芸員』の専門化において『上級学芸員（情報）』（？）のありようを先行的に示す」「結果として、AD 非正規従事者の正規職員化、新たなポスト創出の契機とすることができる」「大学における講義、美術館員等外部講師による公開講座、美術館等における実習の組合せにより博学連携に寄与する」ことなどが考えられる。

想定される受講者像としては、「司書資格や学芸員資格を取得している者などで、AD に従事することを希望する者（社会人、大学院生）」「現に AD に従事している者で、更にレベルアップを図り、また、正規職員となることを希望する者」「学芸員（等）の現職者で、AD の分野を学ぼうとする者」などが考えられる。

4. 課題と今後の取り組み

教育・研修実施機関に大学（大学院、付置研究所等）NPO 法人等、学生の身分に正規の院生、科目等履修生、公開講座受講生等、科目の位置づけ（単位履修）に正規科目、特設〔公開講座等〕科目、非正規科目等、授業形態に通常授業、集中講義、インターネットの活用等が考えられること、また、受講経費の多寡も考慮の対象なる。

先の研究会で論議が集中したのは、研修修了までの単位数であった。上に述べたように、現状では幅を持たせている。32 単位はいかにも多すぎという意見とこれからの専門職は大学院卒程度のレベルは必要との両論があった。学費、受講者像など現実的な問題をめぐっては、受講者数を増大するためアートの概念を広げて考えるべきこと、連合大学院や各種助成金の活用など組織連携やプロジェクトの多様なあり方を模索すべきこと、教育・研修の展開を長期的な観点と経過措置的な中・短期的対応とに分けて戦略的に展開すべきなど貴重な提案が寄せられている。今回の発表を含め、今後学会としての意見集約をしつつ、事前調査（モニタリング）を行い、その後、対象機関・対象者の募集へと進めていきたいと考えている。

国立新美術館情報資料関連施設見学会

公募研究発表会、総会が開かれる研修室 AB（3 階）から竹林のルーフガーデン越しに対するのが今年、1 月 21 日に開室した国立新美術館のアートライブラリです。開架の閲覧室には約 1 万冊の美術書と展覧会カタログ、新着雑誌が置かれています。建築・デザイン・写真専用の小部屋もあります。

美術館本体と政策研究大学院大学との間にはさまれて、別館があります。その地下 1 階（閉架書庫）、1 階（展示・閲覧室）、2 階（資料整理室）もまた、国立新美術館の情報資料提供事業のための施設になっています。政研大の側からでなければ分からないのですが、この別館は、旧歩兵第三聯隊兵舎、戦後は東京大学生産技術研究所として使われていた建物の一画を保存したものです。二手に分かれて、アートライブラリと別館のそれぞれを見学していただきます。

国立新美術館アートライブラリー 利用案内

位置 国立新美術館 3階

開館日時・休室日

毎週火曜日（祝日又は休日に当たる場合は開室し、翌日休室）

年末年始（12月29日～1月3日）

特別整理期間

開室時間

11:00-18:00

閉架資料閲覧請求、および複写申請の受付は17:00で締め切りとなります。

所蔵資料

近現代美術・デザイン・建築などに関する図書	図書	約1万6千冊
日本及び海外で刊行された展覧会カタログ	和書	約1万3千冊
美術・デザイン・建築などに関する雑誌	洋書	約3千冊
	展覧会カタログ	約3万3千冊
	和カタログ	約3万1千冊
	洋カタログ	約2千冊
	雑誌	約190タイトル
	和雑誌	約120タイトル
	洋雑誌	約70タイトル

国際交流基金 アート・カタログ・ライブラリー旧蔵資料について

国立新美術館アートライブラリーでは、(財)国際文化交流推進協会がJACプロジェクトを通じて収集し日本で唯一の美術カタログ専門図書室であったアートカタログ・ライブラリーにて1996年から8年間にわたり公開されてきた約2万冊の展覧会カタログを引き継ぎ、公開しています。

利用方法

閲覧

閲覧室の開架書架にある図書、カタログ、雑誌は、自由にご覧いただけます。

アートライブラリーの資料は、多くのものが閉架書庫に入っています。

閉架資料をご利用の場合は、検索用端末でご希望の資料を検索し、資料請求票を出力してカウンターまでお持ちください。

1回に閲覧できる閉架資料は5冊までです。

さらに申請される場合は、さきに閲覧中の資料を返却して、再度申請してください。

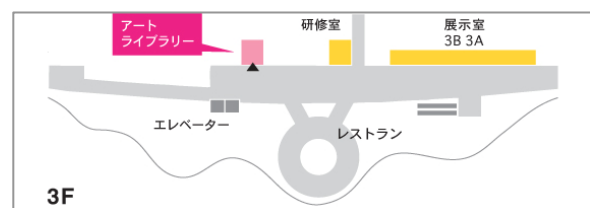
特定の資料に関しては、保存上などの理由により閲覧できない場合もあります。

資料複写

アートライブラリー所蔵資料の複写サービスは、複写申請書をカウンターに提出していただいた上で、ご自分でコイン式コピーをご利用して、複写をしていただけます。

レファレンス・サービス

資料についての質問などは、受付カウンターまでお気軽にご相談ください。



国立新美術館別館—旧陸軍第一師団歩兵第三連隊新兵舎について

国立新美術館は、1928（昭和3）年、旧陸軍第一師団歩兵第三連隊新兵舎として建設され、戦後、東京大学生産技術研究所（一部、物性研究所）として利用されてきた場所に建てられました。

旧陸軍としては初の鉄筋コンクリート造兵舎建築であったモダンな兵舎は、建設当時、関東大震災により大打撃を被った東京における震災復興の象徴となっただけでなく、その後に日本の近代合理主義建築の一傾向を示す重要建築物として位置づけられました。

美術館建設に際し、その存在を後世に伝えるため、外観意匠について特徴的な壁面及び中庭への通路口の一部を国立新美術館別館として保存することとなりました。



アート・ドキュメンテーション学会
Japan Art Documentation Society
2007年度（第18回）年次大会 予稿集
2007年6月23日
<http://www.jads.org>

jads

